

人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究

—Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として—

P-F Study の因子構造別に編成した2実験グループのバレー

ー・ボール競技における行動差について*

一 谷 彊

Factorial, Experimental and Clinical Study of Personality Especially in Terms of the Rosenzweig P-F Study and His Personality Theory; A Differential Study of Within-group Behaviors in Playing Volley Ball Game between the Obsessive and Paranoid Groups as Constructed in Accordance with the Factor Scores Derived from Factor Analysis of the P-F Study

Tsuyoshi ICHITANI

Received January 16, 1965

目 次

I. 目 的	1
II. 方 法	1
III. 結果及び考察	5
IV. 結 論	14
V. Summary	15
VI. 参考文献	16

I. 目 的

Rosenzweig (1951) の提唱するように、人格の個性的な力働性を投影法を通じて把握するために、彼の考案せる P-F Study を因子分析した結果に依れば、(i) 強迫型対妄想型、(ii) ヒステリー型対心気症型及び (iii) 内罰型対外罰型の3種の対極性因子を分析することが出来た(一谷, 1964)。これら3種類の因子的人格構造のうち、本研究では、強迫型対妄想型の因子軸の両極的人格類型者群が、如何様な行動的特徴を有するか、両極類型者群の行動の力働性を明らかにすることに依って、この両極性因子の性質及び実体を解明し、この因子の妥当性を検討しようとするのが本研究の目的である。殊に、今回は、バレー・ボール競

技を通してこの因子の妥当性を吟味しようと試みる。

II. 方 法

1. 被験者の選出

強迫型対妄想型の因子軸の両極人格類型者について比較的純型の者を選択するには、先に P-F Study を因子分析して得られた因子構造(一谷, 1964)から、Ledermann (Thomson, 1951 Ledermann, 1939)の方法によって、P-F Study の各評点因子の回帰係数を求め、これによって、各個人の得点(Z-score)によって標準化されたもの)に重味付けをして因子得点(factor score)を算出し、強迫型または妄想型の因子についてのみ典型的な因子得点を示している人格類型者を抽出することにした。即ち、強迫型対妄想型の何れかの因子得点については、Z-score で1.00を超えているが、他の2つの対極性因子、ヒステリー型対心気症型及び内罰型対外罰型では、因子得点が1.00を超えないで、出来るだけ零に近い者を抽出すれば、一応、強迫型乃至妄想型の何れかに顕著にかたよっている人格類型者を夫々選択し得たことになる。

京都市立深草小学校第5学年の男子児童164名について、P-F Study を実施し、各児童の各評点因子をZ-score に改め、更に、P-F Study を因子分析した後、回帰係数を求めて、これによって重味付けをして、因子得点を求めた結果について、その分布の状態を示すと第1表及び第1図のようになる。

* 本研究に当り住田勝美教授及び P-F Study の日本版創案者である林勝造先生に御指導を頂いた。また、京都学芸大学心理学専攻生辻、小川、中野の諸君に協力して頂いた。ここに感謝の意を表する。

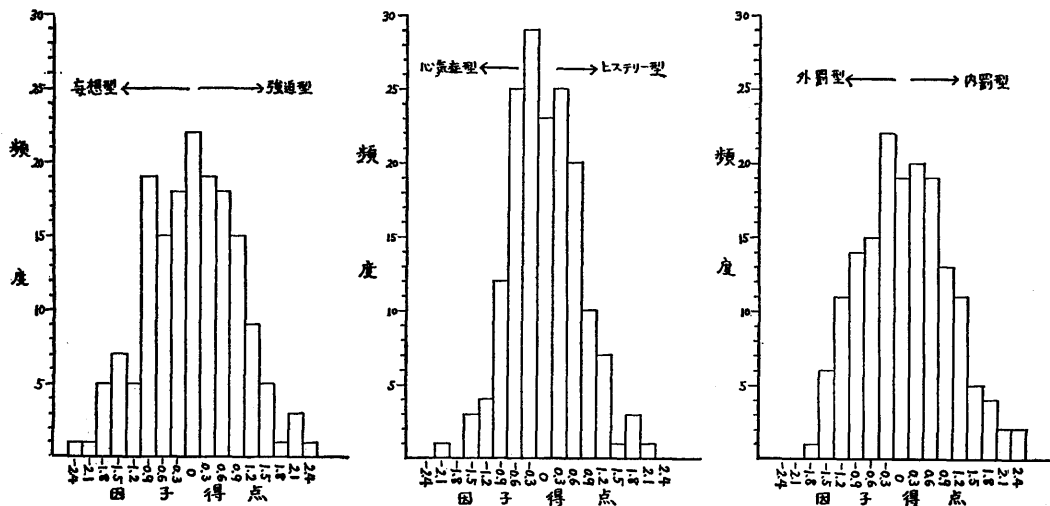
第1表 因子得点分布（深草小学校5年男児164名）

因子得点	因子	I	II	III
2.25～ 2.54	強 迫 型	1	ヒ ス テ リ ー 型	2
1.95～ 2.24		3		2
1.65～ 1.94		1		4
1.35～ 1.64		5		5
1.05～ 1.34		9		11
.75～ 1.04	妄 想 型	15	10	13
.45～ .74		18	20	19
.15～ .44		19	25	20
-.15～ -.14	妄 想 型	22	23	19
-.45～ -.16		18	29	22
-.75～ -.46		15	25	15
-1.05～ -.76		19	12	14
-1.35～ -1.06	妄 想 型	5	4	11
-1.65～ -1.36		7	3	6
-1.95～ -1.66		5	心 気 症 型	外 罰 型
-2.25～ -1.96		1		
-2.55～ -2.26		1		
N		164	164	164
M		-0.016	0	0.087
σ		0.918	0.708	0.888

このようにして、因子得点については、強迫型及び妄想型の人格類型者を抽出することは出来るが、本研究では、バレー・ボール競技を実験場面として用いることにしたいので、人格類型以外の各個人の要因については、出来得る限りこれを統制したいと考えて、

- (i) 知的側面は知能指数 (IQ)
- (ii) 身体的側面は身長及び体重

(iii) 運動能力は50m走、ボール投げ、立巾跳び、サージェント・ジャンプ(垂直跳び)、及び懸垂力を測定し、これらを夫々統制して最終的に本研究の実験に用いるための被験者として選択したのは、強迫型群及び妄想型群各12名、合計24名であって、これらの被験者の各測定値は第2表に示す通りである。ここに示されているように、因子得点については第I因子の強迫型群(+)と妄想型群(-)とにのみ有意な差が認められ、第II因子のヒステリー型(+)対心気症型(-)については有意な差は認められず、第III因子の内罰型(+)対外罰型(-)についても有意差はない。IQ、体格、運動能力も何れも差は認められないがわずかに懸垂力にのみ有意差があったが、運動能力全般からみてバレー・ボール競技に大きな影響を及ぼすとは考えられなかったので、一応このままで実験を進めることとした。むしろ注目すべきは因子得点の方で、第I因子は一応、強迫型かまたは妄想型の方にかなり顕著にかたよっている児童を選出しようとしたが、164名中から、知能、体格、運動能力などをすべて統制して、尚且つ、人格面も第I因子以外を統制しようとする、実験に必要なだけの人数を確保することが出来なかった。第II及び第III因子でも、(+)または(-)の方向にかなり顕著にかたよっている者(±1.00を超える者)をも僅かの人数ではあるが加えざるを得なかった。ちなみに選出した両群の被験者の因子得点の分布状態を示すと第3表のようになって、第I因子得点については、強迫群は+1.0以上のところに、妄想群は-1.0以下のところに集中するが、第II及び第III因子得点については略々±1.0以内のところに集中しており従って大体において、第I因子の両極性の人格類型の純型群が得られたと解してよからう。



第1図 因子得点分布図

第2表 実験群として最終的に選出した24名の各測定値の比較

群	成員	因子得点			I Q	身長	体重	50m走	ボール投	立巾跳	垂直跳	懸垂
		I	II	III								
強迫型群	A	0.85	0.24	-0.12	123	134.7	25.6	53.0	48.2	42.9	49.4	44.8
	B	0.89	1.02	0.03	116	142.2	33.6	57.6	62.6	52.3	57.4	44.8
	C	1.06	1.34	-0.23	87	133.4	23.2	54.5	35.6	61.8	45.4	48.1
	D	0.77	-0.15	0.04	104	140.5	33.5	51.5	51.8	47.9	57.4	48.1
	E	1.00	-0.30	0.20	123	138.3	27.8	60.6	50.0	69.3	73.6	48.1
	F	1.46	-0.83	0.46	100	137.3	30.6	37.9	57.2	44.8	43.4	38.3
	G	1.38	-0.83	1.08	91	136.5	26.0	51.5	48.2	58.6	49.4	44.8
	H	1.68	-1.51	-0.49	90	130.2	25.8	51.5	41.0	46.0	51.4	51.3
	I	1.17	-0.41	0.56	119	—	—	—	—	—	—	—
	J	1.20	-0.06	0.23	101	138.3	27.4	42.4	50.0	46.0	47.4	48.1
	K	0.78	-0.39	0.61	120	127.2	24.0	47.0	48.2	55.5	51.4	44.8
	L	1.35	-0.46	0.96	107	128.0	26.4	48.5	39.2	49.2	53.4	48.1
	合計	13.54	※7.54	※5.51	1263	1486.6	303.9	556.0	532.0	574.3	579.6	509.3
	M	1.13	※0.63	※0.46	105.3	135.1	27.6	50.5	48.4	52.2	52.7	46.3
	σ	0.17	0.44	0.33	12.45	4.95	3.62	6.45	7.47	7.53	7.40	3.30
妄想型群	a	-1.09	0.77	1.04	109	134.5	27.4	54.5	46.4	59.9	59.4	61.1
	b	-1.58	-1.13	1.07	95	128.0	26.2	39.4	55.4	46.0	43.4	54.6
	c	-0.83	0.24	-0.31	132	132.4	26.8	63.6	62.6	56.7	55.4	80.7
	d	-1.25	-0.02	0.31	120	136.8	35.6	39.4	42.8	41.0	41.4	44.8
	e	-1.03	0.87	-0.30	123	128.0	22.4	47.0	46.4	46.0	49.4	48.1
	f	-1.22	0.03	0.92	107	134.2	30.2	56.1	44.6	56.7	49.4	44.8
	g	-0.84	1.12	0.87	100	133.2	28.0	50.0	51.8	49.2	49.4	64.4
	h	-3.13	-0.31	0.65	105	136.2	28.8	60.6	60.8	64.9	57.4	57.8
	i	-1.16	-0.45	-0.10	91	142.8	30.2	56.1	48.2	49.2	37.3	48.1
	j	-1.83	-1.07	-1.54	92	131.5	25.8	48.5	50.0	55.5	55.4	64.4
	k	-1.35	-1.40	1.58	95	141.3	31.4	51.5	60.8	58.0	49.4	48.1
	l	-0.69	-0.46	0.11	92	130.0	26.0	43.9	44.6	41.0	57.4	48.1
	合計	-16.00	※7.87	※8.80	1261	1608.9	338.8	610.6	614.4	624.1	604.7	665.0
	M	-1.33	※0.65	※0.73	105.1	134.1	28.2	50.9	51.2	52.0	50.4	55.4
	σ	0.57	0.38	0.44	13.10	4.14	3.30	7.80	9.28	7.59	6.45	10.68
平差均の値検の定	t	13.59	0.11	1.62	0.03	0.50	0.79	0.17	0.70	0.60	0.76	2.59
	p	p<0.001	p>0.8	p>0.8	p>0.8	p>0.8	p>0.8	p>0.8	p>0.4	p>0.5	p>0.4	0.02>p>0.01 sig.
有意差		sig.	non	non	non	non	non	non	non	non	non	sig.

- (註) 1. 資料の欠如しているのは測定時の欠席による。
 2. 運動能力については、T-score に換算されている。
 3. ※印の個所は絶対値による計算を行った。

以上の様な結果で、被験者の選出については、処期の条件統制の目的は一応達成されていると解したい。尚、グループ・ダイナミックスの見地からして、成員間に於けるグループ内の凝集力は、実験着手前においては略同等と解したい。何となれば、深草小学校の第5学年児童全員の中から、学級の如何を考慮せず、2群を構成したので、強迫並びに妄想型両群ともに、各学級からの児童で構成され、従ってあまり特定学級の

児童にかたよることがなかったからである。

2. 装置及び器具

小学校児童であるため簡易バレー・ボールによる競技とした。学校の校庭にバレー・ボール・コートを敷き、バレー・ボール、ポール、ネット及び笛を使用。

3. 実験・観察の手続き

この研究では簡易バレー・ボールを実験観察の素材として採択し、強迫型者群及び妄想型者群の行動を観

第3表 選出した強迫型・妄想型両群の
被験者の因子得点の分布状態

因子得点	因子群	I		II		III	
		強迫	妄想	強迫	妄想	強迫	妄想
2.25～2.54							
1.95～2.24							
1.65～1.94		1					
1.35～1.64		3					1
1.05～1.34		3		1	1	1	1
.75～1.04		5		1	2	1	3
.45～.74						3	1
.15～.44				1	1	2	1
-.15～.14				2	2	3	2
-.45～-.16				3	2	1	2
-.75～-.46		1		1	1	1	
-1.05～-.76		3		2			
-1.35～-1.06			5		2		
-1.65～-1.36		1		1	1		
-1.95～-1.66		1					
-2.25～-1.96							
-2.55～-2.26			1				
N		(12)	(12)	(12)	(12)	(12)	(12)
M		1.13	-1.33	.07	-.20	.32	.28

察したのであるが、この素材を採択した理由としては、

- ① 被験者が男子であることから、他の作業とくらべて興味があり、長時間持続することが出来る。
 - ② 競技そのものが、誰にでもなじめて比較的簡単に出来、ルールがやさしい。その上割合に変化に富む。
 - ③ チーム・プレイであって、チーム内での協力や協同、従って個人の競争よりも、チーム同志、群同志の競争が要請される。それでいてチーム内での各個人の役割、分担が明瞭である。
 - ④ 時間が左程かららず、競技自体も余りスピーディでもなく緩慢でもなく、従って観察者は児童の行動を比較的容易に且つ明確に観察出来る。
 - ⑤ 児童の心身の発達に相応した運動である。
- 競技の方法は、
- ① ネットの高さ1.8m
 - ② チーム人数：1チーム9名
 - ③ セット数：2セットを原則とし、15点セットとする。1対1の場合のみ第3セットまで実施。
 - ④ 競技のルール：競技は9名で、レギュラー・メ

ンバー以外の補欠選手は、自チームの応援をなし、1セット終れば必ず交代させ、会員が少なくとも1セットは出場出来るようにした。9名を前衛、中衛、後衛に分ける。他のルールについては概ね正式の規則に準じて実施。

(1) 競技場面の観察

観察者並びに実験者は京都学芸大学の心理学専攻の辻、中野、小川の3名の学生である。

観察はチェック・リスト法である。1セットが約20～25分で、セット毎にリストに記入する所謂時間見本法を採用。行動の記録はカテゴリーシステムで、前以て用意された11項目に亘って、各個人についてカテゴリーのチェック・リストを使用した。11項目のカテゴリーは

- ① 攻撃的（非難的）行動
- ② 協力的（妥協的）行動
- ③ 審判抗議
- ④ 支配的（指導的）行動
- ⑤ 意欲的（積極的）行動
- ⑥ （喜びの）感情表出
- ⑦ 不平・不満
- ⑧ 過緊張行動（所謂“あがる”行動）
- ⑨ 萎縮的行動
- ⑩ 消極的行動
- ⑪ 非妥協的行動

である。チェックの方法は、ある一連のまとまりのある行動を一回の行動として、それを、用意しておいたチェック・リストのカテゴリーの中に一回のチェックとした記録。これは動作や発言であらわされる場合やその両者の複合の場合も含む。そして観察者に比較的明瞭にとらえられるもののみとした。

(2) 質問紙法

外面的な行動として観察することの出来なかった各個人の感情や内観をとらえるために、また行動として観察し得た資料を補い、証拠づけるために質問紙法が採択された。項目の詳細は結果の項に譲る。

(3) 討議場面の観察

討議場面として、以下の如き場の構成を行ない、その発言の内容や行動を出来るだけ記録した。

- ① 自己の所属するチームの名称付け。
- ② キャプテン選出会議。
- ③ 反省会（試合終了後各群ともに夫々一回ずつ）等々である。

(4) 実施期間及び場所

昭和36年10月3日より、11月17日まで合計15回、深草小学校において実施。実験者は観察者に同じ。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 試合成績（得点経過）について

上に述べた被験者について、簡易バレー・ボール競技を行わせた成績（得点経過）は、第4表に見る如くである。更にこれを勝数と全試合を通じての両群の平

均点とで示したものが第5表であり、セット毎の得点の分布は第6表となる。これよりして、両群については、バレー・ボールの基礎的技量に関して等質となるように選出したのであるから殆ど優劣の差は見受けられないのは当然のことと考えられる。全体として勝敗

第4表 試合成績（得点経過）

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
日付	10:7	10:11	10:12	10:13	10:18	10:19	10:20	10:24	10:25	10:31	11:2	11:8	11:9	11:10	11:17
強迫型群	セ I	15	9	16	13	13	9	16	6	12	16	16	16	16	14
	ツ II	16	8	16	13	16	16	6	16	14	7	15	9	12	22
	ト III	16	—	—	—	10	13	—	16	—	16	16	12	14	—
	平均	15.6	8.5	16.0	13.0	13.0	12.7	11.0	12.7	13.0	13.0	15.6	12.3	14.0	16.0
妄想型群	セ I	17	16	13	16	16	16	18	16	16	9	9	14	7	7
	ツ II	10	16	11	16	10	9	16	7	16	16	17	16	16	20
	ト III	9	—	—	—	16	16	—	12	—	11	12	16	16	—
	平均	12.0	16.0	12.0	16.0	14.0	13.7	17.0	11.7	16.0	12.0	12.6	15.3	13.0	9.5

(註) 1. 日付は月日を示す。

2. 数値の空白の個所は、第Ⅱセットまでで勝敗の決定したことを示す。但し第15回目(11月17日)は、降雨のため第Ⅱセットで試合を中断した。

3. 平均点のうち、 でかこってあるのは勝ったことを示す。

第5表 全試合平均点と勝数

	勝 数	全試合平均点
強 迫 型 群	7 回	13.63
妄 想 型 群	7 回	13.92

(註) 第14回目までの勝数と平均を示す。

第6表 セット毎の得点の分布

得 点	強 迫 型 群	妄 想 型 群
18		1
17		2
16	17	17
15	2	
14	2	1
13	4	1
12	3	3
11		2
10	1	2
9	3	4
8	1	
7	1	3
6	2	

(註) 第14回目までの得点の分布を示す。

や得点には有意な差は認められないが、第5及び第6表からして、妄想型群の方がやや優位気味である様に思われる。併しながら15回の試合経過をみると、第4表にみるように、

- 前期（1～3回あたりまで）
は両群略同じ成績
- 中期（4～7回あたりまで）
は妄想型群の方が明らかに優勢
- 後期（8～14回あたりまで）
は強迫型群の方が明らかに優勢

であったことがうかがわれる。しかも第6表にみるように、強迫型群の方が妄想型群に比して割合に纏まりのある得点の仕方をしているのに対して、妄想型群の場合は非常に優勢な時もあると思うと、劣勢の時もあり、“むら”が多い様な傾向にあり（但し、統計的に有意な差が認められる程に顕著なものではないが）、13～15点の間の得点回数が少ない。また、先に述べたように強迫型群では、最初の前半は不利であったが、試合の回数を重ねるにつれて後半では優勢になって来ていることがうかがえる（第4表）のである。P-F Study を因子分析した結果、この強迫型群に大きく寄与している評点は i 及び m であることが明きらかとなっている（一谷, 1964）が、i は、

- ① 自己の非に対してその後始末を自分で償おうとする行為の徹底性乃至固執性

- ② しかも、この行為の徹底性を動機付けているものは、自罰意識とその解消手段である張消し（undoing）の機制であって、単なる行為の徹底性、固執性などとはやや異っている（Rosenzweig, 1938, 1944 Madison, 1961）。

斯くの如く自力だけに依存して、他力を排除する要因として、 m を仮定することが出来るだろう。一般に m は行為の後始末を自分がやるのでも、また他者にやって貰うのでもなく、時の成行きや社会的規範にゆだねるといった態度に出ること、即ち無関心（unconcern or indifference）をあらわす場合がある。従って、強迫型における無関心としての m は i と同様、自分に依存して他者には依存しないことを強調するための他者に対しての無関心と考えられる。かくして、強迫型群の方が所謂物事に対処しての完全主義（perfectionism）から来る“粘り”があることが示唆されているものと解することが出来るのではないかと（Mayer-Gross et al., 1960 住田, 1962）。

2. 両群の行動差について

10月7日の第1回目の試合から11月17日の最終回の試合まで、合計15試合についてチェック・リストによる行動観察記録を行ったが、それを整理してみると、第7表の如くなる。即ち、

- ① 攻撃的行動については、日々の平均から見て、強迫型群の方が8.2であるのに対して、妄想型群では25.4と大きく、0.1%の水準で有意な差が認められた。
- ② 協力的行動では、両群の間に1%水準で有意な差が認められた。即ち妄想型群よりも強迫型群の方が協力的であることがうかがわれる。
- ③ 審判抗議は、強迫型群の日々平均が4.0に対して、妄想型群は1.4と、1%水準の有意差がある。これは、審判に際して、強迫型群に不利な結果をもたらすようなジャッジを度々行なったので斯様な結果になったものと解される。
- ④ 喜びの感情表出については、両群間に5%水準で有意な差が認められ、強迫型群に多い結果となっている。
- ⑤ 非妥協的行動では、妄想型にやや多く、有意な差のある傾向を示唆する程度である。
- ⑥ 過緊張的行動、即ち所謂“あがる”という行動は、11月10日の第14回目の試合までは、両群を通じて妄想型群に僅か1回だけ見られたのみであるが、11月17日の第15回目の試合では最終回であるため、特に観衆の児童を300名近くつけたので斯様な結果になったものと解される。外的条件が変わると、両群ともに動揺するが、その動揺の度

は、一回のみでは不分明ではあるが、妄想型群の方が強迫型群に比してより多く動揺しやすい傾向にあるのではないかと。

要するに、チェック・リスト法による両群の行動観察の結果では、

攻撃性乃至非妥協性では	妄想型群>強迫型群
協力的性では	妄想型群<強迫型群
喜びの感情表出では	妄想型群<強迫型群
過緊張では	妄想型群>強迫型群

となっており、その他では左程行動的な差異はないことがうかがわれる。

Rosenzweig P-F Study を因子分析した結果において、妄想型者の反応様式の中核となっている評点因子はE及びEである。即ち他者からの処罰をおそれる自我が存在するので、自我を防衛する機制としては、投射機制（projection）が働くことが予想される。即ち敵意を他者に投げかけることによって自己を防衛せんとする（Rosenzweig 1938, 1944 住田・林・一谷, 1964）。かくして、妄想型群では、強迫型群に比して攻撃性乃至攻撃的行動または非妥協的行動が多くなることは理解出来る。従って逆に協力的性や妥協的行動が少なくなり、強迫型群にこれが多くなる。一谷（1964）に依れば、強迫型者も妄想型者も共に、自己を確立し、自我独立を期したいとの欲求の強いことには変りはないが、それが前者では、個体内に於いて先ず自己を確立することが先決となるが、後者では個体間において、即ち他者とのかかわりあいにおいて問題となってくる相異がある。従って、また妄想型群ではこれが投射機制と相まって敵意の表明となり、他者非難・攻撃となるのであろうが、強迫型群では、自己を確立するにも、先ず個体内に於ける完全さが問題となり、そのために、他を攻撃することを避け、また自己の完全を期そうとすれば、他を非難するよりも他との妥協乃至協力が先決となるのではないかと。かくして、協力的性に於いては、攻撃性と対照的な結果を示すものと解したい。

喜びの感情表出が、強迫型群に有意な差を以て妄想型群より多い理由は、上記の攻撃性及び協力的性について両群の示した結果を補強しているものとみたい。即ち、強迫型群では自己の独立乃至確立を個体内において期そうとするがために、一般にはかなり緊張が高くなり、得点や自チームの成功によって緊張が解放されることになり、それがあらわな喜びの感情表出となつてあらわれるのではないかと。過緊張については既に少しく触れたところであるが、妄想型群は、他者との関係において自我の独立を期そうとするために、観衆などがあることによって容易に動揺し易いのではないかと

第7表 チェック・リストによる両群の行動差の比較

行動 カテゴリー	回 日付 群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計	平均	σ	t-検定
		10:7	10:11	10:12	10:13	10:18	10:19	10:20	10:24	10:25	10:31	11:2	11:8	11:9	11:10	11:17				
① 攻撃的	強 妄	10 30	6 19	5 25	16 19	13 41	16 19	6 25	9 38	5 18	12 29	2 30	8 17	9 29	5 27	1 15	123 381	8.2 25.4	4.4 9.1	t=6.370 p<0.001
② 協力的	強 妄	4 0	5 1	5 2	5 2	5 1	4 2	2 1	3 3	4 0	2 2	9 5	6 1	2 0	0 0	0 0	56 20	3.7 1.3	2.3 1.4	t=3.333 0.001<p<0.01
③ 審判抗議	強 妄	5 2	1 1	4 2	4 6	16 3	4 0	0 0	1 1	8 4	0 0	3 0	3 0	9 0	0 0	2 1	60 21	4.0 1.4	1.8 1.7	t=3.939 0.001<p<0.01
④ 支配的	強 妄	10 14	12 7	10 3	8 5	14 12	9 12	8 11	9 8	11 14	6 13	11 4	3 9	15 7	1 9	3 6	135 138	9.0 9.2	3.9 3.5	_____
⑤ 意欲的	強 妄	5 1	0 7	4 8	3 13	15 8	4 5	10 1	13 10	9 8	6 6	18 10	12 8	17 15	1 3	5 2	122 105	8.1 7.0	5.6 3.4	_____
⑥ 喜びの感情表出	強 妄	20 25	13 37	45 16	30 25	52 21	34 21	31 37	53 35	37 16	19 18	33 3	7 6	47 13	27 1	69 27	517 301	34.5 20.1	16.0 13.2	t=2.599 0.02<p<0.05
⑦ 不平・不満	強 妄	4 3	8 2	2 10	5 6	1 5	5 4	4 3	5 4	3 5	1 2	1 0	3 2	0 2	9 9	0 0	51 57	3.4 3.8	2.6 2.8	_____
⑧ 過緊張 ($\sim$ あがる $\sim$)	強 妄	0 0	0 0	0 0	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	6 12	6 13	0.4 0.9	1.5 3.0	_____
⑨ 萎縮的	強 妄	0 0	1 0	2 4	1 1	0 1	0 0	1 0	1 0	0 1	0 2	0 0	0 0	0 0	0 0	2 0	8 7	0.5 0.5	0.7 1.0	_____
⑩ 消極的	強 妄	0 1	2 1	0 0	0 2	1 11	0 0	1 0	0 1	6 2	2 2	2 0	0 0	2 2	2 2	2 0	20 33	1.3 2.2	1.5 2.7	_____
⑪ 非妥協的	強 妄	0 0	0 0	0 0	0 0	0 6	0 0	0 0	2 10	0 5	4 0	0 2	0 0	0 5	0 2	0 0	6 30	0.4 2.0	3.0 1.1	t=1.882 0.05<p<0.1

- (註) 1. 「強」は強迫型群, 「妄」は妄想型群を示す。 2. 細胞内の数値は各群のチェックされた頻数を示す。
 3. 頻数の分布は正規でないものもあるが一応の目安として平均と標準偏差を提示した。
 4. 行動カテゴリーの排列順序は最初に記載したものと多少順序が変えられている。

と思われる。

不平・不満については、両群の間に有意な差を認めることは出来なかったが、その理由としては次の様に解したい。即ち、妄想型群では、不平・不満が単に失意や失望の表明としてなされるのではなく、更にもっと強い形で、攻撃的行動として表明されるのに対し、強迫型群では逆に攻撃的行動を抑制して不平・不満の程度に止めるのではないか。従って両群の間において有意な差を認めることが出来ず、略々同じ程度にあらわされるのであろう。支配的（指導的）、意欲的行動は両群の間に有意差がなかったのは、強迫型も妄想

型も共に、自我の独立を期そうとする点では共通であるので、意欲的になり、支配的（指導的）になり勝ちな点は首肯出来る。

3. 質問紙の解答結果における両群の差について

行動的側面と共に、両群の成員の内省や内観がどの様であるかをみて、両群の特性を吟味するために、質問紙法によってこれをみようとした。それについて逐一報告しよう。

(1) 自己の所属チームへの好嫌

「自分のチームは好きか嫌い」を質問した結果は第8表の様な経過を辿っている。妄想型群では、自己

第8表 所属チームへの好嫌の変化

月 日	10 : 12		10 : 25		11 : 10		合 計	
群	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強
好	7	10	8	12	9	11	24	33
嫌	5	0	2	0	2	0	9	0
x^2	5.49		2.64		2.20		10.42	
p	0.02 > p > 0.01		0.20 > p > 0.10		0.20 > p > 0.10		0.01 > p	
有意差	あり		なし		なし		あり	

(註) 1. 「強」は強迫型群を、「妄」は妄想型群を示す。

2. 各群の頻数の合計が12名になっていないのは欠席者があったことによる。

の所属チームを嫌っている者が常に存在するが、第1回目調査時(10月12日)から第2, 3回目と段々減少してはいる。一般にチームの成績(勝敗)がよくなれば集団の凝集力は高くなると考えられるが、妄想型群ではその傾向が余り見受けられない。これに対して、強迫型群では、自己所属チームを嫌っている者は終始一貫して皆無である。勝敗の如何に拘らず凝集力は高いと考えられる。即ち、妄想型群では自我の独立を期

するのに対人的な関係が重視され、自己主張が強くそれを表面におし出す傾向の持ち主の集まりであり、従って自然と攻撃性が強くなり、惹いてはそれがチームの成員相互の間に嫌悪感を生み出すことになるが、強迫型群では、自我独立は強いがそれが内面化する傾向の者が多いので、責任感が強い(i)ところからこのような結果が示されたと解することが出来る。

(2) ポジションの決定方法

第9表 ポジションの自主決定と被指定に対する意見の変化

月 日	11 : 8		11 : 9		合 計	
群	妄	強	妄	強	妄	強
自主決定	4	8	4	7	8	15
被指定	7	4	7	5	14	9
x^2	2.11		1.11		3.01	
p	0.20 > p > 0.10		0.30 > p > 0.20		0.10 > p > 0.05	
有意差	なし		なし		傾向あり	

(註) 1. 「強」は強迫型群を、「妄」は妄想型群を示す。

2. 各群の頻数の合計が12名になっていないのは欠席者のあったことによる。

第10表 ポジションの自主決定と被指定とどちらが一生懸命やれるかの意見

月 日	11 : 12	
群	妄	強
自主決定	4	7
被指定	7	4
x^2	1.64	
p	0.30 > p > 0.20	
有意差	なし	

「ポジションは自分達で決定した時と、先生（実験者のこと）に指定された時とどちらがよいか、また一生懸命やれるのはどちらの時か」を質問した結果は第9表及び第10表に示ようになる。この2つの表にみられるように、何れも両群の間に有意な差を認めることは出来ないけれども、傾向としては妄想型群と強迫型とは全く逆の傾向を示していることに気付く。即ち、第9表では、妄想型ではポジションの自主的決定よりも、被指定を好む者が多く、強迫型ではその逆となっている。後述するように、全般的にみて、妄想型群では、集団内の特定児童による専制的態度に不満を持つ者が多く、常にリーダー格の児童の云いなりになっていなくてはならず、チーム・プレーの面白さや、成員の個性が充分発揮し得ないことに対してお互いに

敵意を持つことがうかがわれ、自己主張のみに終止する傾向があった。従って、こうした不満を充足するためには、時に実験者によってポジションを指定された方がよいとの意見が多く出たものと解せられる。それに対して強迫者群では集団内で成員相互がよく反省し(i)、相互に集団内のとりきめに従っていこう(m)としているので特にとりたてて不満もなく割合にスムーズにゲームが進行するのでこの様な結果がもたらされたものと解せられる。第10表に関しても、これと同様の理由によって、妄想型群と強迫型群との間に逆の傾向をもたらしたとの解したい。ポジションの自主的決定と被指定とに対する希望意見の具体的内容は第11表の如くであって、積極的に上述の理由を支持するものと解したい。

第11表 ポジション決定の希望意見の内容

	妄 想 型 群	強 迫 型 群
自主的決定が	○ うしろだとボールがこないから。 ○ 自分の行きたいところへいける。 ○ キャプテンがうまく考えてくれる。 ○ 負けるから。	○ よく点が入るから。 ○ 不公平がなく自分達できめた方が勝つ。 ○ 度々よいところに行ける。 ○ いきたいところに行ける。
被指定がよい	○ 色々なところに行ける。 ○ 前衛に行けるから。 ○ もめるから。 ○ 面白くやれるようにきめて下さるから。	○ よい場所に行けるから。 ○ わからない。 ○ いつも後衛になる。 ○ 早くきまるから。 ○ なかなか決まらないから。 ○ はっきりできるから。

(3) 自己のポジションへの好嫌

「自分のポジションをどう思うか」について質問した結果は第12表の如くである。何れも統計的に有意な差は認められないが、初期及び中期には、両群共に自己のポジションを嫌う者が見受けられるが、最終の段階では、強迫型には自己のポジションを嫌う者が無く

なり、妄想型群にのみそれが残っていることがうかがえるが、こうした事実についても、自己の所属チームへの好嫌に対する解答と同様の方向に向かう傾向を示しており、従って、ポジションの好嫌についても自己所属チームへの好嫌と同様の解釈を下すことが可能であろう。

第12表 自己のポジションへの好嫌に対する意見の変化

月 日	10 : 12		10 : 25		11 : 17		合 計	
群	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄
好 き	8	7	8	7	12	9	28	23
嫌 い	2	3	3	4	0	3	5	10
χ^2	0.27		0.21		3.43		2.16	
p	0.70 > p > 0.50		0.70 > p > 0.50		0.10 > p > 0.05		0.20 > p > 0.10	
有 意 差	なし		なし		傾向あり		なし	

(註) 1. 「強」は強迫型群を、「妄」は妄想型群を示す。

2. 各群の頻数の合計が12名になっていないのは欠席者のあったことによる。

(4) ポジションへの希望

「どのポジションに行きたいか、好きなポジションはどこか」をたずねた質問への解答は第13表に示す通

りである。これによると、一般に中衛を希望し後衛を嫌う傾向がある。ポジションへの希望は、初期では有意な差が無かったのが、中期、後期になるにつれて両

第13表 ポジションへの希望に対する変化

月日	10:3		10:12		初 期		10:25		11:8		中 期		11:10		11:17		後 期		合 計	
群	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄	強	妄
前 衛	2	4	3	3	5	7	3	4	5	5	8	9	4	6	4	6	8	12	21	28
中 衛	6	6	6	8	12	14	6	7	5	6	11	13	3	5	5	6	8	11	31	38
後 衛	0	0	1	1	1	11	2	0	2	0	4	0	3	0	3	0	6	0	11	1
χ^2					0.04						4.23						7.29		9.92	
p					0.98>p						0.20>p>0.10						0.05>p>0.02		0.01>p	
有意差					なし						なし						あり		あり	
備 考					10:3, 10:12 の合計						10:25, 11:8 の合計						11:10, 11:17 の合計		6回の合計	

(註) 1. 「強」は強迫型群を, 「妄」は妄想型群を示す。

2. 各群の頻数の合計が12名となっていないのは欠席者のいたことを示す。

群の間に明きらかな相異があらわれてきている。即ち、後期になると、強迫型群では前、中、後衛の3者に略々均等して分布しているのに対して、妄想型群では、前、中衛に集中して、その頻数も略々相半ばし、後衛を希望する者は皆無で著しく偏していることがうかがえる。このような事実について以下の様に解したい。

試合を重ねるにつれて、自己の適性がわかって行き、従って本来ならば、それに相応して自己に適したポジションを選ぶべきであるが、妄想型群で後衛に行くべきだと反省している者の全く無いのは、チーム全体のために自己の能力を考え直そうとする内省的な気持及至内罰的な意識を持つことが出来ず、専ら投射機制によって、他を非難・攻撃し、自己を主張しよう(E, E)とする人格特性に帰因するものであろう。然るに強迫型群では、一般には嫌われている後衛というポジションでも、自己の能力と適性に従ってこれを希望する者が漸次増加して行っているという事実は、強迫型性格群の特徴のあらわれであろう。即ち、強迫型群の根底にあるのは、P-F Study への反応を通してみるときは主としてiが中心となっていることは既に述べた通りであるが、iの防衛機制としては帳消し(undoing)及び、完全主義(perfectionism)を考えることが出来るのであって、自己の確立は妄想型と同様に強いことは強いが、それがむしろ個体内的(intrapersonal or intrapsychic)に働くから、実際の行動としては内省的、反省的となり、従って自己

の適性になかったポジションを希望する者が回を重ねるにつれて多くなることは首肯出来る。一般に、妄想型性格群の特徴は、自己の弱点や非を卒直に認めることを避けて、それをつくろうために相手や他者の弱点や失策、非などを無理にでも探して非難・攻撃する(投射的)傾向がある。これに反して、強迫型性格群の特徴は、自己を反省して自己を責め、自らその責めをとって罪滅ばしをしようとし、自己の行動を取り消そうとする(取消しまたは完全主義的)傾向が強い。斯様な観点よりすれば、自己の希望するポジションが時の経過と共に、試合を重ねるにつれて、次第に容容して、強迫型群と妄想型群とで、かなり顕著に相異したポジションを希望するようになるのは充分に理解し得るところであって、第13表に示す様な結果を得たことは当然の帰結といえる。

(5) バレー・ボール競技の巧拙に対する自己評価

「自分はバレー・ボールが上手だと思うか」との質問に対しては、第14表に示すような結果を得た。「普通」と評価している者が両群共に多いことは共通であるが、「上手」と自己評価している者が、強迫型群では第1回目→第2回目→第3回目と回を重ねていくとき1→0→0という変化に対して、妄想型群では3→3→2と変化し、逆に、「下手」と自己評価している者については、強迫型群で3→3→1、妄想型群では0→0→0となっており、極めて興味深い注目すべき事実が見られる。勿論ここでは、第三者または観察者等による客観的な比較基準がないから、「上手」また

第14表 バレー・ボールの巧拙に対する自己評価

月 日	10:12		10:25		11:10		合 計	
群	強 迫	妄 想	強 迫	妄 想	強 迫	妄 想	強 迫	妄 想
上 手	1	3	0	3	0	2	1	8
普 通	6	9	8	8	10	9	24	26
下 手	3	0	3	0	1	0	7	0
x^2	4.43		6.00		3.04		12.48	
p	0.20 > p > 0.10		0.05 > p > 0.02		0.30 > p > 0.20		0.01 > p	
有 意 差	なし		あり		なし		あり	

は“下手”という自己評価が直ちに過大評価また過小評価であると断定することは許されないが、これまでの研究（長沢・中村, 1960）では、強迫型群では過小評価、妄想型群では過大評価の傾向があることが実証されているので本実験でも上記結果は同様の傾向と解することは十分に可能である。斯くして、強迫型群では自我確立を個体内に求めるがゆえに、自己反省、内省乃至自己批判が加わって、過小評価の傾向をみることは予想に難くないし、また、妄想型群では自我の確立を個体間に求めるがために、自己主張、他者非難などが加わって自己の競技能力を過大評価することも亦肯し得る処である。

(6) チーム強化の方針または条件

「自分のチームが強くなるためにはどうしたらよいか」との質問に対する解答は第15表に見る如くである。これによっても明らかなように、両群間で著しい対照をなしていることは、①チームの強化のための条件や方針が強迫型群ではかなり特定項目に集中する傾向があるのに、妄想型群では強迫型群よりも多方面に亘ってそれが分散的に見られる。②チーム強化のための条件としてかなりはっきりした相異を示すものは、“チーム・ワークの必要性,” “練習の必要性” 及

び、“責任の完遂”の3条件である。③妄想型群では、“チーム・ワーク,” “練習,” “責任感”の3者、就中前2者を重視しているのに対して、強迫型群の方も一応これらを重視し、強調はしているものの、最も重視されているのは“練習の必要性”即ち“技量の向上”という点である。このことは、両群共に、自己の所属する集団の行動の結果や自己自身の行動の結果について、その弱点や長所を反省した結果生じたものであると解したい。妄想型群はチェック・リストによる具体的な行動観察に於いて記載したように、攻撃的行動、非妥協的行動が多く、協力性に乏しいという事実がみられたことからみて、チーム・ワークに弱点があるからこそこれを強調しているが、強迫型群ではこの点については左程問題はなく、かなり自信を持っているからこそ、それ程の必要感を感じていないで、むしろ練習による技量の向上を重視しているのである。④10月3日、10月12日、10月25日の3回に亘る調査において、第1回目及び第3回目は全く同じく両群相反する対照的な傾向を示しているが、第2回目の調査では両群とも第1、3回目とは逆になって対照的な傾向を暗示している。その理由については十分な証拠はないが、兎に角、一貫して両群が相反する対照的な傾向を

第15表 チーム強化の方針また条件に対する意見の変化

月 日	10:3		10:12		10:25		合 計	
群	強 迫	妄 想	強 迫	妄 想	強 迫	妄 想	強 迫	妄 想
1. チーム・ワークをしっかりとる	1	5	4	1		4	5	10
2. 練習（技量面）をしっかりとやる	5	3	3	5	5	2	13	10
3. 行動面をしっかりとやる（責任などを全うする）	3		2	3	2	2	7	5
4. 作戦をうまくやる		1		1		1		3
5. リーダーの指示に従う				1		1		2

とっていることは重視すべき点であって、強迫型者群と、妄想型者群との集団行動を通じてみると、両型は全く対極的な性格特徴を保有していることを示唆しているものと解すべきであって、極めて興味深い事実といわねばなるまい。⑥合計欄でわかるように、強迫型群では、“チーム・ワーク,” “練習,” “行動面(責任)” の3条件にしばってチーム強化の条件が出現しているのに対して、妄想型群では、上記3条件に加うるに、作戦、リーダーの条件をも取り上げており、5条件全部に亘ってチーム強化の条件が取り上げられているという事実は、妄想型群の方が、強迫型群よりも集団行動がスムーズに行われ難いことを示しているものと解してよいのではなからうか。こうした具体的な行動観察については、後述しよう。

要するに、妄想型群ではチーム・ワークがとり難いが、強迫型群ではそれには可成り自信のあることが容易に推察出来る。このことは後述の反省会における討議の際にこの弱点を如実に露呈することからも充分断定出来る。試合場面では、勝たたいとの欲求が異常に強いために或る程度自己の個人的な自己主張や他者非難・他者攻撃乃至所謂“我まま”は抑制されているが、その様な抑制条件のない解放的な自由討議場面などでは各人が個人的な気持ちを“あらわにむき出しに”しているので、両群の特色が著しく対照的に露呈されていることが試合場面よりも一層よく見られる。

4. 両群の行動の自由観察及び討議場面の観察

今まで、試合成績得点経過、試合中の行動、質問紙に於ける解答を通して、両群の特徴をとらえ、それを通して妄想型者及び強迫型者の性格特徴に接近せんとする一つの手がかりとして来たが、ここでは、これを更に補い、充分な証拠を得るために、主として記述的に、両群の行動を観察していくことにしよう。観察は一応日を追うて記述することを立て前とした。

(1) 組分け(チーム編成)のための会合(10月3日 全員24名中1名欠)

強迫型群は机の所に一列に座り、じっと大人しくしている。妄想型群の騒々しい行動を眺めている。

妄想型群は2〜3名はきちんと着席しているが他の者は立ったり歩き廻ったりして騒々しく落着いていない。そして自分達のグループの成員達と大声で話し合っている。

(2) 自チーム名の自主的決定(10月3日)

強迫型群は、暫くの間すわったまま何の動きも見せず妄想型群の騒々しい行動を複雑な表情で眺めていたが、突照誰うとなく、窓辺に集まり、円陣を組み静かに話し合っている。そのうちに、1人が妄想型群の方へ“やかましい”と云いに行ったが、それ以外は妄

想型群には無関心に真剣に静かに討議していた。やがて“仲良しチーム”と決定したことを報告しに来て元の席に着く。

妄想型群は、最初、活発に個々人が勝手に好きなチーム名をあげて強く自己主張するので決まらなかった。「巨人」「東映」等のプロ野球チームの名前が飛び出したり「H・B」などの名称提案がなされた。2〜3名の者が強硬に自己の意見を通そうとして張り合う。自分達の提案した名称に全員賛成を得られそうでないとするや、観察者達の処へ「〇〇チームだ」と直接云いに来る。これに反対の者はこれを取り消すように云いに来るといった具合で仲々まとまらない。彼等は、すわって輪になって相談するのではなくて、1つのテーブルを囲んで立ったまま大声で騒がしくやり合っているだけで遂には意見の対立から喧嘩を始める始末となった。兎も角、強迫群よりは少し早く“Hチーム”と名称を決定したが、必ずしも全員一致で決定したのではなくて、依然として兎や角云っていた者があった。強迫型群が“仲良しチーム”と決めたのに対して「何や、仲良しやて/子どもみたいでつまらん」(何だ、仲良しだって/子どもみたいでつまらないの意)などと嘲ったり笑ったりしていたが、リーダー格とでもいべきボス的な2〜3名の者が、「H」ではおかしい」と云うので“仲良し”に対抗する名称として“少年チーム”を提案主張した。そこで“少年チーム”と“Hチーム”とを票決により、やっと“少年チーム”と決定した。これに反対する者もいたが、リーダー格の児童に大声でなじられて有無を云わせず決定してしまった。

チーム名決定後、妄想型群は各自大声で相手の強迫型群のチームをけなし、自チーム名を自讃していた。

またチーム名決定後質問紙調査を行なった。この時、強迫型群は大人しくしていたが、妄想型群の中には早く書いてしまって室内を走り廻る者もいた。

その後、自己の所属チームの成員の中で名前を知らない者がいないかをたずねると、強迫型群では知らない者のところへ個人的に静かに名前をたずねに行く者が2〜3名いたが、その他はすわったままであった。ところが妄想型群は大声で「彼奴と彼奴は知らん」と云いながら、その者の前に行き、直接に「お前何というのや?」(お前の名前は何というの?の意)とたずねたり、また周囲の者に「彼奴等は何んというのや?」と指でさしながら尋ねていた。

(3) 背番号の決定(10月7日)

背番号を強迫型群に渡した時、彼等は大人しく着席し、すらすらと番号の決定をして行った。円陣になって手をあげさせて決め、決まらない時はジャンケンで

決める方法をとっていた。

一方、妄想型群に背番号が渡されるや否や、全く蜂の巣をつつ突いた様な雑然さで取り合いをしていた。

(4) ポジションの決定状況 (10月7日)

強迫型群は、ポジションの決定に際して、速やかに円陣を作り、協議により決定したが、妄想型群は、各自の希望をとって決まらない時はジャンケンで決定した。強迫型群より5分遅れて決定した。

(5) 15回の試合中、セット毎の作戦の練り方

強迫型群はその都度円陣になって、民主的に話し合っていた。従って作戦の時間が充分でないようであった。

妄想型群は、リーダーの独断でポジションや補欠の決定が行われた。彼等は作戦を練ることよりも早く試合を始めたいことでそわそわして落ち着きがなかった。また、彼等はポジションが決まると各自勝手にボール遊びに夢中になり、他者のことには無関心であった。

(6) キャプテンの決定状況 (10月11日)

強迫型群は静かにすわっているが話し合いは行われない。余り積極的ではない。成員D等が加わろうとせず、最初は不満らしかったが、成員Gの先導で、成員Eがキャプテンに決定、成員Eは終始何も云わずにすわって聞いていた。

妄想型群は会を指導する者が無く、皆、口々に叫んでいる。成員cの名をあげて、勝手に決まった決まったと云って相変らず騒々しい。不満者も出てくる。成員kの名前も出て来て、仲々纏まりがつきにくい。自分の思っている成員の名前をどなるだけで、成員cやkは大人しくすわっていた。

(7) 試合後の反省会

(A) 強迫型群のみの反省会 (10月13日)

深草小学校第5学年2組の教室にて、議長はキャプテンの成員E、出席者11名。この日の試合結果は2：0で強迫型群の敗北。

① 一般的印象

典型的な会議形式で、意見発表者も挙手で行っていた。静かな場面であるが、活発な意見も出、他者の意見もよく聞き、真面目に反省討議していた。責める者、責められる者も出たが、議長の巧みな議事進行方法と個人の判断で納得する場面もしばしば見られた。

② 具体的記述

○「今日の試合で悪かった点について」

“ライン外でボールをとるかとりえないか”で意見が対立し、やや個人攻撃となる。しばらく議論を戦わせた後、議長が採決してライン外でボールをとることに決定、その後“ボールをとるときふつかり合いそうな時どうするか、”“サーブについて”“ボールが後衛に

廻るように、”“後衛の者はほんやりしないこと”“自分のポジションを忘れないようにすること”“失敗しても成員同志文句を云わないこと”などについて、議長の巧みな司会で完全に近い討議が行われた。結局、議長が「サーブは皆うまく出来るように練習をし、またボールを後衛にも渡すようにすること」と結んで次の議題に移る。

○「自分のチームの良い点と悪い点について」

良い点については意見がなく、悪い点では「後衛の者がほんやりしているのだからそんなことがないようにすること」、「D君とG君が喧嘩するのをやめてもらうこと」と云う意見が出て次の議題に移る。

○「相手チームの良い点と悪い点について」

“平均してサーブがうまい。”“失敗したらよく文句を云うのはG君(強迫型群)とc君(妄想型群)とだが、G君は喧嘩みたいなことをするが、それは止めるように”と云うことで落ち着いた次の議題に入る。

○「ぶっかり合う時の処置について」

「声を出す」、「よし」といったらよい」、「引き受けた」と云う方がよい、「短かい言葉がよい」等の発言があって、議長が「云いやすい言葉で大声で云おう」とまとめた。最後に実験者側から次の提案をした。

○「勝った方のチームに賞品を与えた方がよいか」

「貰わない方がよい。見せびらかすから」、「真剣にならないから」、「貰うことはかり考えて一生懸命やらないから」等の理由で、貰わない方がよいという意見と貰わないと強くなるから貰った方がよいという反対意見とがあったが、結局、「貰わない方がよい」という意見の方が多く、採決の結果

貰った方がよい	0
貰わない方がよい	6
分らない	4

となる。

(B) 妄想型群のみの反省会 (10月19日)

議長はキャプテンの成員c、出席者10名。この日の試合結果は2：1で妄想型群の勝利。

① 一般的印象

最初始まった時から雑談が多く、騒がしくて討議が出来ない。議長が前に出て司会することを恥ずかしがってこれを取り静めることが出来ずにいた。全く烏合の衆的な集まりで、椅子の上になねころんでいる者、前の方に出て来てひとりではしゃぎ廻り、今日の試合について大声で自慢している者等々、全くばらばらで個々人が勝手に振舞っていた。仕方なく実験者が取り静めてやっと反省会に入る。

⑤ 討議の状況の具体的記述

。「今日の試合で悪かった点について」

手をあげるでもなく、あちこちから勝手気儘に自分の意見を述べている。議長ももてあましていて、実験者側で静めてやる。

「ボールを相手チームの後衛へ打ち返せばよい」、「それは僕がもう云った」と云って騒ぎ出す。「後衛の人が悪い」、「f君が人と人との間へ打つからミスするのだ」、「後衛の人は自分だけでボールを相手の方へ返そうとするからミスをするのだ」、「守備の位置がばらばらだ」等の意見が出る。ここでまた騒がしくなり議長の統制がとれなくなる。突然1人が出て来て、「議長、お前は頼りない」と云う。続いて、「g君が悪い」、「後衛のb君は1回で相手の方へ入れようとするから悪い」、「E君（強迫型群のリーダー）の方は前の方へボールを送ってから相手の方へ入れている」、「他の者のポジションを犯している」等々口々に叫び収拾がつかなくなる。やっと静めて再開する。

「負けてくるとやけになる」、「キャプテンcはミスをする物凄く怒るし、相手のキャプテンは余り怒らないからいい」、「そうや、そうや」（そうだ、そうだの意）とどなる。

。「ボールが人と人との間に落ちた時の処置について」

「自分の守備範囲を線で囲んでおくといよい」という意見が出た。これは自己中心的で、強迫型群との性格的な相異を如実にほのめかしている。

。「勝ったチームに賞品を与えた方がよいか」

実験者の側からこの問題を提案したところ、「貰った方が余計頑張る」、「がめつい奴だ」、「ほうびを貰えるなら一生懸命頑張る」、「貰う方がよい」等々を大声でどなる。議長はこれに対してただ傍観しているだけ。採決の結果は、

貰った方がよい	4
貰わない方がよい	4
分らない	1

となった。

以上の様に、①組分けのための会合、②チーム名の自主的決定、③背番号の決定、④ポジションの決定、⑤セット毎の作戦の練り方、⑥キャプテンの選出、⑦試合後の反省会の如き比較的典型的な場面に於ける観察の記述から、強迫型群と妄想型群との間には、集団行動においてかなり対照的な相異があり、惹いては、これが両群の性格的特徴を如実に示しているものと解したい。即ち、先に Rosenzweig P-F Study を因子分析した結果では、強迫型と妄想型とでは、自我の確立または独立という点に関しては共通の因子軸とし

て抽出されているが、前者はこの自我の独立乃至確立を個体内的に実現しようとする傾向があるのに対して、後者はこれを個体間的に実現せんとするところに相違のあることが指摘された（一谷、1964）ことは既に記載した通りである。そして、強迫型では、かかる自我の確立のために、P-F Study の反応というならば、i 及び m が主たる反応様式となっている。m は i を補強するに過ぎぬ程度の意味しか持たぬが、i はその自我防衛機制としては帳消し（undoing）及び完全主義（perfectionism）を考えることが出来るが、斯様な観点よりすれば、強迫型群の行動や討議その他の各場面での観察は、こうした点をかなり積極的に暗示するが如き結果となっていることは見逃せない。具体的には、試合後の反省にも先ず他者の行動の批判や非難よりも、自己批判が顕著であるし、チーム名の自主的な決定に際しても、背番号の決定に当たっても、或いはまたポジションの決定についても、作戦の練り方にしても、円陣を作って相互の静かな討議によって進められておりながら、そうかといって積極的な意見の交換がおこなわれているわけでもないのに、かなりのまとまりを持った集団としての行動がとれるところなどは、因子分析によってもたらされた結果を証拠付けるのに充分なよりどころとなるものと解したい。

他方、妄想型では、個体間的に自我を確立していくに当って、P-F Study の反応というならば、E、E が主体となっているが、これらの反応には、その自我防衛機制として投射を考えることを Rosenzweig は提案している。こうした観点からすると、妄想型群の討議場面での行動や、その他の場面での行動観察の結果は、充分にこの様な点を積極的に支持し得るものであると考える。具体的には、試合後の反省会においても、先ず自己を反省することよりも、自己を自慢し、失策やミスを指摘、批判し、自チームの成員について手きびしい非難、攻撃的な言動に及んでおるだけでなく、個々人がバラバラでまとまりがなく極めて自己主張的、他者批判的で集団としてのまとまりを持った様相を呈することは少ない。チーム名の決定、背番号の決定、ポジションの決定、キャプテンの決定や作戦の練り方等に於いても、所謂“烏合の衆”的な印象が強く自己本位、自己主張のみが先走り、ややもすると他者への攻撃、批判が多くなるのである。斯様な観察からの事実、これ亦、因子分析からもたらされた結果を積極的に支持するに足るものであると考えられる。

IV 結論

Rosenzweig P-F Study を因子分析して得た因子は、P-F 反応の動機的水準を可成り適確に把握しているであろうと考えられるが、これらの因子の実体性

について吟味検討を加えることは、因子の性質を明らかにし、実体を証拠付けるのに極めて重要なことといわねばなるまい。Rosenzweig P-F Study に因子分析を施して得た因子は①自我確立（独立）か非確立（非独立）か、②個体間的であるか個体内的であるかに依存して、(i) 強迫型～妄想型、(ii) ヒステリー型～心気症型、(iii) 内罰型～外罰型（又は内向的～外向的）の3個の因子を抽出することが出来たが、今回の研究では、このうち、強迫型～妄想型の対極性因子に照明をあて、その特質を明らかにすることが目的であった。

斯うした目的のために、統計的な操作によって、知能、体力、運動能力等を統制し、性格に関しては比較的強迫型、または妄想型に近い純型の被験者を選出し、これに簡易バレー・ボール競技を行わせることによって、集団としての強迫型者群と妄想型者群との行動を、競技場面に於けるチェック・リスト法による観察、質問紙法からの解答、討議場面等の自由観察を通して把握し、両群の行動特徴から、両型の性格特質が因子分析によってもたらされたものとの程度合致するか、因子の実体の妥当性をバレー・ボール競技を通して見たものである。被験者は小学校5年男子164名中より各群12名を選出した。その結果

- ① 競技場面に於いては、強迫型群に於いて協力的妥協的行動が妄想型群より顕著にみられ、且つ亦、喜びの感情表出なども強迫型群の方に有意に多かったのに対して、妄想型群では、攻撃的（非難的）行動や非妥協的行動が強迫型群より多く見られ、全く対照的な性格の持ち主の集団であることが明らかとなった。
- ② 更に、これを補う意味で、質問紙法によって両群の個々の被験者に自己のポジションへの好嫌、ポジションへの希望、バレー・ボールに対する巧拙の自己評価、チーム強化のための条件等々について質問したところ、ここに於いても亦、概ね両群の間に対照的な結果がもたらされた。
- ③ 更にまた、自チーム名の自主的決定の経過、背番号の決定方法、ポジションのきめ方、作戦の練り方、キャプテンの選出過程及び試合終了後の反省会等の場面での討議その他を観察したところ、これ亦全く対照的な結果がみられた。

総じて強迫型群が内省的、自己批判的でありながら協力的であり、比較的静的であるのに対して妄想型群は自己主張的、積極的ではあるが、内省力に乏しく他者批判的で非難・攻撃的言動が多く、集団としてのまとまりがとれにくい傾向にあった。

そもそも、Rosenzweig P-F Study の因子分析結

果に依れば、強迫型群の中核となっている評点因子は i 及び m であり、妄想型群のそれは E 及び E' である。これらの評点因子の有する心理学的意味及び、これらの評点因子の根底となる自我防衛機制と対応させて如上の結果を見ると本研究の結果は極めて積極的にこれらの両群の特質を、惹いては、強迫型～妄想型の因子の存在と実体を支持することを示唆しているものとみられるのである。

今後の研究課題としては、残された因子、即ちヒステリー型～心気症型及び内罰型（内向的）～外罰型（外向的）の両因子について同様の実体性の吟味の必要性が望まれる。

Summary

Through his factor analytic study of the P-F Study, Ichitani found three main bipolar factors, i. e. obsessive vs. paranoid, hysterical vs. hypochondriacal, and extropunitive vs. intro-punitive. The purpose of the present study is to identify and to clarify the entity of an obsessive vs. paranoid bipolar factor. The subjects used were 12 obsessive tendency boys and 12 paranoid tendency boys who were all in the 5th grade of an elementary school in Kyoto City. These 24 boys were selected from 164 5th grade boys. They were all homogeneous in intelligence, physical construct and athletic abilities, but were heterogeneous in personality. One group of 12 boys was dominant in the obsessive tendency factor score, and another group of the remaining 12 boys in the paranoid tendency factor score. The volley ball game was played by these two groups of boys, and it was observed how the within-group behavior differed from each other. Generally speaking, the behaviors of the paranoid tendency group were active, positive, aggressive, self-assertive and non-cooperative, whereas the behaviors of the obsessive tendency group were cooperative, compromising, comparatively static, reflective and self-critical. According to the result of the factor analytic study of the P-F Study undertaken by Ichitani previously, the essential reactions of the obsessive type of persons to frustration were i- and m- reactions. But the central reactions of the paranoid type of persons to

frustration were E- and E- reactions. When the psychological meanings and the underlying ego defense mechanisms to which these types of reactions contribute were related to the results above mentioned, the present study very positively supported the existence or the entity of the obsessive vs. paranoid bipolar factor.

参考文献

- Ledermann, W. (1939) A shortened method of estimation of mental factors by regression. *Psychometrika*, 4, 109-116.
- Madison, P. (1961) Freud's concept of repression and defense, its theoretical and observational language. Minneapolis, Univ. Minnesota Press.
- Mayer-Gross, W., Slater, E., and Roth, M. (1960) *Clinical psychiatry*. 2nd ed., London, Cassell.
- Rosenzweig, S. (1938) The experimental measurement of types of reaction to frustration. In Murray, H. A. (ed.) *Explorations in personality*. New York, Oxford Univ. Press, (1st print., 1938) 5th print., 1953, 585-599.
- Rosenzweig, S. (1944) An outline of frustration theory. In Hunt, J. McV. (ed.) *Personality and the behavior disorders*. Vol. 1, New York, Ronald Press, 379-388.
- Rosenzweig, S. (1951) Idiodynamics in personality theory with special reference to projective methods. *Psychol. Rev.*, 58, 213-223.
- Thomson, G. H. (1951) *The factorial analysis of human ability*. 5th ed., London, Univ. London Press.
- 一谷 彌 (1964) 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として——：正常児群の因子分析 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 25 (開学15周年記念号) 45—60.
- 長沢寛・中村祐治 (1960) 実験編成グループにおける集団内行動の差についての実証的研究 京都学芸大学卒業論文 (未発表)
- 住田勝美 (編) (1962) P-F Study 研究論文集 近畿精薄児教育研究会資料 (未発表)
- 住田勝美・林勝造・一谷彌 (1964) ローゼンツァイク 人格理論 京都 三京房